

大蔵省高官と裸で折衝

副会長 上野山 信一

最近、毎日のように大蔵省官僚の不正や汚職のニュースが、テレビ・新聞等で賑わっております。こんなおり35年前の話ですが、私が体験したエピソードをご紹介します。思い筆をとったわけです。

昭和34年から38年にかけて、私は自衛隊北部方面総監部会計課主計班長として、札幌で勤務しておりました。主計班長というのは予算を担当し、北海道の全部隊の予算割り当てを行う部署で、比較的権限もありがたい配置でした。

毎年夏ともなれば、大蔵省の防衛担当の主計官（現在の予算委員長長の越智氏やミスター防衛庁の西事務次官ら）が、部隊視察の名目で来られ部隊を廻られました。その時の接待が私の主任務のようなものでした。当時、北海道は北方重点主義の施策により、人員・装備ともに膨大な予算で、急に金持ちになったような錯覚をおぼえたものです。そんなおり昭和38年春、大蔵省主計局長が来られるということで、私は定山溪ホテルに案内の役目を命ぜられ、空港からホテルに案内し、夜の会食の手配だけをして帰ることになっていました。しかし、せっかく温泉に来たのだからと思い風呂に入り、ゆっくり首まで湯につかっていい気持ちになっていたところ、湯煙のむこうから「今日は大変ご苦労さんです。よろしくお願いします」という声がするではありませんか。よく見るとさっき案内してきた主計局長ではありませんか。びっくりして「いいえ」と答えながら湯につかったまま、私の出身地、家族の状況、北海道勤務のことなど、雑談を交えてお話をしました。

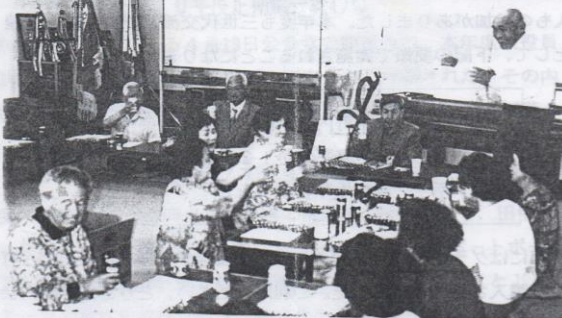
局長は、北海道勤務が10年は長いのでお気の毒ですね。内地部隊に帰れない理由は何ですか？（私は内心今の仕事が性にあっていて別に帰りたいとも思っていませんでした）と云われ、私はつい赴任旅費の予算がないためでしょうと答えてしまいました。すると局長は、私が東京に帰ったら陸幕（昔の陸軍省のようなもの）に話をしよと云われ、私は気にも止めずその場でお別れして、部隊に帰った次第です。

ところが、さきのお話も忘れていた頃東京から連絡が入り、8月の異動で広島第十三師団司令部へ転勤の内示と、予算も紐付きで部隊も指定され、これは主計局長の力のおかげかなと改めて痛感した次第です。

その後、第十三司令部を経て岡山勤務になり停年、今日ここ岡山に私が在るわけです。現在、あの時北海道での主計局長に感謝しつつ、生活している次第です。

白寿会ニュース

本会（銀 申 氏）は田中野田老人クラブの愛称で、60歳以上の方の任意加入とし、現在会員は60余名です。年1回の総会と随時バスツアー、ゲートボールなどの親睦行事を実施しております。写真は本年度の総会・懇親会で（5月31日・会誌）、大勢の方が出席され盛会でした。



わが郷土を語る（その35）
中尾 佐之吉

今にして知る 辰巳村 長瀬浪次先生 のこと

勅其概因銘之日

業精于勤行成于忠古聞其語今見其人長瀬君浪次是也父甚吉母中務氏居于備前国御津郡今村君為其二男以嘉永四年五月十八日生性温厚而謙年小立志從學有方及長從事於教育奉職於順則野田今村三小学校連任校長歷任三十余年取至功績可見焉為官庁所賞明治三十四年三月岡山県知事以為模範教員賜金拾五円三十五年以老退休村民衆議贈書及物件以表彰其德焉明年三月官賜金六拾五円每歲例賜之於特旨言三十八年轉為今村麻書記進為助役四十二年八月二日以病卒享年六十葬于先墓之側君以精勤終始富公德以益世于學校于道路每有公事輒投資以助其實官賞之鄉里欣之及卒遠近追悼焉請余勅其概因銘之日

私が初めて長瀬浪次さんの名前を知ったのは、岡山市史で、明治の学制改革以前に開設されていた市内の塾（寺小屋）の記事によってである。その後、虫明松次郎さんが少年の頃、浪次さんから「日本政記」（頼山陽著）などを教わったことが、松次郎さんの履歴書に書かれていて、一層関心もたれ、浪次さんのことをもっと知りたいと念願した。その頃、辰巳の墓地で浪次さんの石碑にお目にかかる。碑文は、上掲のように漢文である（註1）。非才の私ながら、これを現代文に意識しようと試みた。この結果明治の文明開化の時期、教育の職務にたずさわって、郷土の人々の教化に努力された浪次さんのことが、くわしくわかりありがたく思う。そして、郷土の先聖者浪次さんのことを、少しでも多くの人にお知らせすべきだと、このシリーズ（わが郷土を語る）に加えることにした。ただ、碑文の私なりの現代訳はつぎのとおりであるが、漢文に弱い私のことだから、誤りなきを期しがたい。大意でもお伝えできればとの私の意図に免じ、ご寛容のほどを。

「業は勤むるに精しく、行は思ふに成る。（註2）」という古くから聞くその言葉どおりの人を今に見る。その人とは、長瀬君浪次なり。

父甚吉、母中務氏、備前国御津郡今村において、嘉永4年（1851年）5月18日に生まれてその次男となる。性温厚にして謙虚、年少にして学問の道に志をたて、長ずるにおよんで教育のことにしたがる。順則・野田・今村の3小学校に奉職、進んでは校長を歴任する。30余年を経て、その功績見るべきもの数々ありとして、官庁の賞するところとなる。明治34年3月、岡山県知事は、模範教員なるをもって金15円（註3）を賜う。明治35年、本人は、老体の故をもって現役を退く（註4）。村民は、衆議によって、浪次さんへ書状と記念品を贈りその徳行を表彰した。

明くる年3月、官庁は、彼に金65円を毎年賜うることになった。（註5）蓋し、これこそ特旨と言うべきであろう。

明治38年、転じて今村役場の書記となる。のち助役に就任した。明治43年（1910年）8月2日、病のため逝去、享年60歳であった。先祖の墓の側に葬られる。

君は、精勤をもって終始、公徳心に奮むをもって世にも尽くす。学校に、道路に、公の事業ある毎に進んで投資して、その費用を援助する。官庁はこれを賞し、郷里の人はこれを欣ぶ。君の卒するに及んで、遠近の人、あとから君のことをいとしんで、その理由のあらましを銘にして、墓石に刻むことを余に請うたのである。（撰者 河上市蔵）

註1 碑文の撰者は、残念ながら、どのような方かよくわからない。碑文には、略字も使われていたが、上掲では、概ね普通文字に改めた。また、「」の字はどうしてもわからず、文章の前後から「旨」と推定した。なお、最後から3行目の「輒」（チヨウ）の文字は、いろいろ解釈はあるが、ここでは「進んで」と訳したことも付記しておく。

註2 中国、唐朝時代の文豪として知られる、韓愈（かんゆ）という人の文につぎのことばがある（『漢詩漢文名言辞典』より）。碑文の最初のこのことばの語源は、これではないかと参考のため書き添えた。業精于勤荒于嬉（ギョウハツトムルニクワシク、タノシムニスサム。…学業は、努力すれば精密になり、遊び楽しめば荒廃してしまう。）行成于思毀于随（コウハオモウニナリテ、シタガウニヤブル。…行動は、深く思慮すれば成功し、気ままにすれば失敗する。）

註3 15円をいまの金に換算すると大体6万円くらいか。（註1、註2の碑文と…元の碑文は、贈34・35・36年の1銭たり平均額は、4円36銭20で、合計40002銭）

註4 この年、浪次さんは51歳である。当時は、この歳で老年だと刻む。いまでは考えられないことだ。

註5 65円をいまの金に換算すると26万円くらいと思えるが、これは、思給だろうか。だが、この時期この制度があったのだろうか。調べてみると、恩給制度は大正12年に制定されている。したがって、浪次さんへの賜金は碑文に言われているように特別の計らいといえるわけだ。